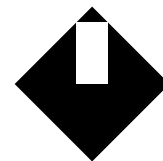


公認会計士稲門会



「会長就任のご挨拶と、 この1年の活動のご報告」



ふじた せいじゅん
藤田 世潤

(1976年3月社会科学部卒業)

はじめまして

2018年7月の総会で、渡辺俊之会長の後を継いで、公認会計士稲門会の会長に就任しました、藤田世潤（ふじた せいじゅん）です。会員の皆様には、日頃より当会の活動にご理解、ご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

私は、1954年3月に板橋区大山で生を受け、1976年に社会科学部（前田幸雄ゼミ）を卒業後、1977年に公認会計士第二次試験に合格し、等松・青木監査法人に入所して、職業会計人の途に入りました。同法人を1986年に退職して、個人事務所を開き、ひたすら実戦で税務業務を覚えました。その後、同志と監査法人を設立して監査業務に従事するとともに、個人事務所を税理士法人成りして税務業務にも携わってきています。

また、当会を通じて多くのご交誼を賜り、鈴木豊、渋谷道夫、勝島敏明、近野博、渡辺俊之の歴代会長のもと、当会の事務局を15年間務めてまいりました。

この1年の活動のご報告

1. 定時総会と懇親会の開催

2018年7月2日に、大隈会館の201・202号室で開催された定時総会で、会務報告、会計報告、事業計画等が原案通り可決承認されました。総会

後の懇親会では、大学理事、奨学課長からのご挨拶を頂戴するとともに、早稲田の会計学関係の先生方や他大学の公認会計士団体の代表等を来賓として多数お招きしました。今年は、鳥根の竹下本店の銘酒「都の西北」を懇親会で初めて用意し、ご来賓にもお土産として差し上げました。

例年通り、正門近くの東寿司地下の座敷に席を移しての二次会は、学生時代のコンパを彷彿とさせる楽しいものです。

2. 役員会の開催

2018年6月5日と12月4日に、事務局である新創監査法人の会議室で役員会を開催しました。

3. 懇親行事

(1) 懇親会

定時総会や役員会の後に懇親会や忘年会を開催しています。役員会後の懇親会は、ここのところ、早稲田界限にいるかと錯覚しそうな店構えの銀座の中華料理屋で催されています。12月4日の役員会後の忘年会では、駆けつけていただいた衛藤征士郎代議士の提案で、安村長生相談役のリードのもと、唱歌「ふるさと」を、参加者全員で合唱して、お開きとなりました。参加者一同、しばし童心に戻り、心洗われるひと時を過ごしました。

(2) ゴルフ

業界（の一部）では、当会のゴルフの強さは有名です。近野博キャプテンのご尽力により、多くの好成績を修めています。今年度は、9月1日に千葉CC野田コースでCPA早慶戦を、9月8日に茨城GCで初めてのCPA早明戦を開催し、ともに勝利しました。また、10月8日に茨城GCで開催された十月会（公認会計士の大学対抗戦）では、池之上孝幸さんが個人優勝、近野キャプテンがベスグロの栄冠に輝きました。さらに、松岡一臣さんが優勝した11月10日に川崎国際で行われた公認会計士稲門会ゴルフ会には、関根愛子さんが初参加されました。

4. 大学・校友会関係

(1) 商学部の「税務会計論」への講師派遣

2018年度の商学部の「税務会計論Ⅰ」の講師を堀秀行さんが、「税務会計論Ⅱ」の講師を平山健治郎さんが担当されました。商学部からの要請によって、当会の会員が講師を務めてきており、堀さんは主に初学者向けの、平山さんは国税不服審判所での経験を生かした裁決事例中心の講義をされました。

(2) 商学学術院×日本公認会計士協会

「公認会計士制度説明会」に参加

2018年4月24日に商学学術院のご協力のもと、日本公認会計士協会の公認会計士制度説明会が、11号館で開催されました。日本公認会計士協会東京会広報委員会委員長の江黒嵩史さん(1999年商学部卒)が公認会計士制度の説明を、後藤彩風(さやか)さん(2018年商学部卒)が合格体験談を話されました。後藤さんの合格体験談はとても具体的で、参加した学生にとって大いに参考になるものでした。なお、藤田も公認会計士稲門会について話しました。

(3) 早稲田大学校友会ゴルフコンペに参加

2018年11月1日に久邇CCで開催された早稲田大学校友会のゴルフコンペに、公認会計士稲門会チーム(近野博さん、小川明さん、有賀美典さん、脇一郎さん)も参加し、数ある強豪団体を抑えて、見事優勝しました。このコンペは全国から、40の校友会団体、193名の参加者があり、全27ホールからフル・ショットガン・スタートという他に例を見ない大規模なものです。

(4) 「総長招待 寄付者と奨学生の集い」に出席

2018年12月20日に大隈ガーデンハウスで「総長招待 寄付者と奨学生の集い」が催され、奨学事業委員会委員長の小西彦衛副会長と藤田が出席し、奨学生の皆さんと親しく交流しました。特に今回は、公認会計士稲門会奨学金の奨学生である中国出身の韓慧さん(商学研究科1年)が、他の奨学金受給者を含めた全奨学生の代表として、素晴らしいお礼のスピーチをされました。

(5) 早稲田大会計研究科第13回学位授与式に出席

2019年3月25日の大学院会計研究科の学位授与式に、藤田が公認会計士稲門会会長として招待され、祝辞を述べました。会計研究科で「金融機関の会計」の講座を、PwCあらた有限責任監査法人の他のメンバーと共同して受け持たれた小林尚明さんが、同授与式で名誉あるティーチングアワード(教員表彰)の学術院賞を授賞されました。

5. 奨学金給付事業—公認会計士稲門会奨学金の給付

公認会計士稲門会では、毎年アジアからの留学生に対して一人50万円の奨学金を支給してきています。今年度は、3名の留学生に計150万円の奨学金を給付し、過去28年間での支給実績は、延べ111名、累計5550万円になっています。この奨学金は田中祐輔さんと大野高正さんが中心となって、会員に広く寄付を呼びかけて、継続してきたもので、大学OBの公認会計士会ではおそらく唯一のものだろうと思われます。なお、定時総会後の懇親会に奨学生も参加予定ですので、親しく話しかけていただければ幸いです。また、会員の皆様のこれまでのご寄付に心より御礼申し上げますとともに、引き続きのご協力を切にお願いする次第です。奨学生はみんなとても優秀で、勉強意欲にあふれていることを付言しておきます。

6. 公認会計士試験合格祝賀会の開催

2019年3月27日にリーガロイヤルホテルで、早稲田大学公認会計士講座との共催で、公認会計士試験合格祝賀会を催しました。合格者、会員、大学教授等が集まり、後輩の合格をお祝いしました。最後は応援部のリードで、「紺碧の空」、「早稲田の栄光」そして「早稲田大学校歌」という古今東西屈指の名曲3曲を高らかに歌い上げて、お開きとなりました。

7. メール・ニュース配信の開始

多くの会員への適時な情報伝達手段として、当会にメールアドレスを登録していただいた会員の皆様へのメール・ニュースの配信を2019年1月にスタートしました。長らく役員会での懸案事項になっていましたが、抜水信博さんと守岡宗一郎さんの協力で実現出来たもので、会員の皆様にとって、公認会計士稲門会と早稲田大学をより身近に感じていただけるための一助になることを願っています。

これからよろしくお願ひ申し上げます

なんだかんだ言ったって、やっぱりワセダが好きで、群れたがりはいないけれど、でもふと懐かしくなったら、是非とも総会にご参集いただき、三七21回「ワセダ、ワセダ、ワセダ、・・・」と声高らかに校歌をご一緒しましょう。

「公認会計士稲門会奨学事業」 －平成30年度奨学事業報告－



(奨学事業委員会委員長)

小西 彦衛

(昭和44年商学部卒業)

奨学事業は奨学資金をお寄せいただいている会員の皆様によって事業を運営しています。本事業を支えていただいている皆様に敬意を表するとともに心から感謝申し上げます。

奨学生の皆さんが学生生活を安定させて勉学に励んでいる姿から、有為な人材を育む奨学事業の意義を実感します。

毎年12月に開催される「総長招待 指定寄付奨学生の集い」では、本事業が学内の奨学金制度の一翼を担っていることが分かります。

アジア地域からの留学生を支えることは、近隣諸国との友好親善のためにも有意義なことと存じます。

奨学生との交流

会員の皆様には、本会報に掲載の奨学生の寄稿文を読んでいただくとともに、定期総会懇親会では奨学生と歓談して、進路等の意欲を交換することをお願いいたします。

奨学金給付の概要

本事業は岐路にあります。給付留学生の人数を従来の4名から3名に変更しました。各50万円の奨学金を給付しています。

奨学資金は、「広く軽く」を方針として、皆様に無理のない拠出をお願いしています。是非、多くの会員の皆様の参加をお願いいたします。

寄付金の方法および取扱い

奨学資金は早稲田大学への寄付金として、所定の振込用紙で大学の口座に振り込んでいただいています。総長名の領収書と所得税の寄付金控除の証明書等が発行されます。

早稲田大学のWebサイトから常時寄付申込みができます。[早稲田 寄付] **検索** で寄付トップ画面に入ります。寄付申込みフォームにインプットする際に、「寄付の種類」は「奨学金」を選び、「指定先」は「公認会計士稲門会奨学金」を選びます。支払方法はクレジットカード決済又はインターネットバンキング決済（ペイジー）です。



平成30年度の事業実績

1. 奨学金の給付状況

大学より次の3名を推薦いただき、各人に50万円を給付しました。(学年は給付時)

金 由羅	政治経済学部	3年	韓国
韓 慧	商学研究科	1年	中国
BURHAN, Nurul	創造理工学研究科	4年	インドネシア

2. 奨学事業収支年度別一覧(単位:万円)

年 度	H3~H26年	H27年	H28年	H29年	H30年	累 計
寄付金収入 (寄付者数)	5,186 (1,600名)	121.5 (45名)	107.5 (43名)	163.5 (48名)	148.5 (42名)	5,727 (1,778名)
奨学金給付額 (奨学生数)	4,800 (96名)	200 (4名)	200 (4名)	200 (4名)	150 (3名)	5,550 (111名)
資金繰越残高	386	307.5	215	178.5	177	

3. 平成30年度寄付者芳名(順不同・敬称略) 平成31年3月31日現在

藤田 世潤	渡辺 俊之	近野 博	安村 長生	勝島 敏明	奥山 章雄	飛永 信雄
内田 善三	小林 晟祐	佐藤 正典	猪股 世紀	里村 豊	西山 隆司	関根 愛子
高井 宏司	水野 義雄	黒沼 憲	山口 俊明	山田真之助	上野 紘志	尾崎 隆昌
石原 裕	小林 正樹	金田 賢二	七松 優	長峯 徳積	吉村 智明	杉田 純
渋谷 道夫	久保 直生	岡野 雄次	松下八寿彦	小暮 和敏	堀 秀行	稲葉 武彦
水谷 太郎	鴛海 量良	福田 安孝	津田 英嗣	袖山 裕行	小西 彦衛	匿名

以上

登録住所及び登録メールアドレス変更の際のご連絡のお願い

会報を登録住所に送付し、メール・ニュースを登録メールアドレスに配信しています。転居や事務所移転等に伴う登録住所やメールアドレスの変更がある際には、公認会計士稲門会事務局宛のご連絡 (info@cpa-tomonkai.jp) もしくはホームページの「お問い合わせ」からご連絡頂くようお願いいたします。ホームページのお問い合わせは、HOME ⇒ お問い合わせ、からもアクセスできます。

会費納入のお願い

今年も会費納入の季節となりました。同封致しました振込用紙で御振込頂ければ幸いです。なお、日本公認会計士協会準会員の方は、印字されている金額を3,000円にご訂正のうえ御振込頂けます。また、ご自身の会費納入状況をお知りになりたい方は、会計担当の副会長もしくは常任幹事にご連絡下さい。

公認会計士 6,000円 日本公認会計士協会準会員 3,000円
(振込先 郵便振替口座番号 00170-2-163893 口座名 公認会計士稲門会)

「日本留学の経験」



韓 慧

(商学研究科 2020 年卒 (予定))

私が日本にやって来たのは4年前のことである。2年前の私だったなら、日本は良い国であるとしか答えないだろう。滞在した3年を残した頃から私は、非常に忙しい毎日を送ることとなり、様々なことを勉強することとなった。日本での長期滞在の経験から母国中国との日本との文化的背景の違いを感じながら受け入れることもできた。今振り返ってみると、日本に来てから修士課程まで充実な留学生生活を過ごしたと自分自身に言えるだろう。

日本滞在初期、日本食に慣れることは、私にとって大きな問題であった。来日後初めて口にしたものは、スーパーのインスタントラーメンでした。そのラーメンは中国のものとは違い、私はあまり食べれずに寝てたことを覚えている。

今は日本の生活に慣れ始める上で、日本のこともさらに好きになることが出来た。早稲田大学で1年間授業を受けて、多種多様なスキルを身につけることができた。専門知識分野において、データ分析やマーケティング分析、消費者分析などの分析手法、物事に対する考え方、世界を見る視点などを知識とスキルを身につけることができた。商学分野において最も重要なのは、市場の主体である消費者を分析し、ニーズをつかみ、適切なサービスや製品を提供することです。したがって、表面にとどまらず、消費者の「真実」と「本質」を見破ることが一番重要視とされている。レビット博士が提唱した「消費者がのぞんでいるのはドリルではなく穴である」という一言はマーケティングで最も重要な格言と言われている。しかしながら今現在消費者のニーズの本質を捕えようとする企業がだんだん減っている傾向がある。特に今現在中国は非常に速いスピードで経済発展を成し

遂げており、膨大な中国市場に進出する日本企業が爆発的に増えることになっているが、中国人消費者の本当のニーズにずれた製品やサービスを提供して、赤字となり、失敗した日本企業は決して少なくはありません。私はこれを非常にもったいないことだと思っており、中国人でありながら日本で大学を通いながら4年ほど暮らした私にしかできないことだとは信じており、日本企業が中国市場に進出する際にいかに無駄なお金を使わずに中国人消費者の真にたるニーズを分析し、つまり日本企業が中国市場に進出最短ルートの設定にお手伝いがしたいと考えている。こうすることで、日本企業が遠回りをせず中国市場に成功進出させることによって、ウインウインな場面を作り上げ、日中の経済発展に貢献し、架け橋になることが私の夢である。

さらに、私の理想と抱負を実現するために、日本企業が海外進出する際によくある「過剰品質問題」を修士論文のテーマとして取り組んでいる。日本企業が海外へ進出する際によく「過剰品質問題」が引き起こすのが現状である。過剰品質は高価格を招き、消費者のニーズとずれていき、国際市場への進出に大きなデメリットがありながら、これをはっきりと認識できず、苦戦している企業が多く存在している。私は、「日本企業にとって、この問題をこの問題を解決したくないのではなく、できないのではないか」という仮説を提出した。

また、日本企業の中国市場進出にお手伝いをキーワードとして、就職活動を展開している。最初は信託銀行、証券をはじめとする金融業界のインターンシップを参加した。色々経験した結果、今現在メーカーをはじめとする製造業に集中して就職活動を展開している。

最後に、最も重要なことは学問の世界を広げたことである。私は学部から修士課程に至るまで専攻が少しずつ変わった。大学では日本語と現代政策、大学院では経営戦略である。正直に言うと、実際に行った研究内容はそれほど変わらないが、研究の内容を解決したり、解析する時に色々な分野で学んだ知識が総合的に働く。授業を受ける時には大変だったけど、今ではすごく役に立っている。以上のように、日本での留学生活は私の人生にとって掛け替えのない宝物になるとともに、私が日中友好に対して何をすべきかを自覚させてくれた大事な期間である。

「今後の夢・抱負、
早稲田大学での生活・思い出など」



金 由羅
(政治経済学部 国際政治経済学科
2020年度3月卒業予定)

こんにちは。早稲田大学政治経済学部、国際政治経済学科4年に在学している金由羅と申します。私を公認会計士稲門会奨学生として採用していただき、誠にありがとうございます。私は日本に来る前、韓国の大学で日本について勉強しました。その大学の経済の授業で、日本が激動のなかで経済発展を遂げてきたということを知りました。その際、バブル景気やその崩壊など、経済変動における経験豊富な日本経済に興味を持ちました。同時に、国家間の経済的活動が増えた事により、2008年の世界金融危機やギリシャのデフォルトなど、ある国の危機が他の国々に及ぼす影響の大きさに危機感を感じました。また、国境を越え経済圏が広がる中、経済活動における問題点を最小化し、経済危機を克服できる方法を研究したいと思いました。そこで、私は世界経済の中での問題を解決するためには、様々な経済的局面での経験を経て成長した日本経済の歴史とその危機対処法を学ぶ事が役立つと考え、日本への留学を決心しました。

早稲田大学の政治経済学部は政治と経済を一つの教育単位として学び、融合的な思考力を養う事に魅力があります。特に、国際政治経済学科の授業では世界化の時代に、国際社会と政治、経済の関連性に関して深く探求できます。授業では現代の日本経済に関する理解を深め、特に現代社会の特徴である経済の世界化や高齢社会への変化に日本はどの様に対処しているのかを勉強しました。また、世界的金融・経済危機の構造に関して学べる授業を通して、2008年以降、世界経済の危機

の原因と実態を正確に把握し、現在世界経済の問題点を発見する能力を養いことができました。そして、より高い経済水準を実現し、経済発展を達成するために必要な取り組みに関する理論を学び、日本をはじめ世界各国における経済政策の比較研究を通して世界経済に対する知見を広めました。

学部の卒業後は、大学院に進学して所属ゼミのテーマである人的資源管理に関してより深く研究したいです。まず、人的資源管理システムの組織間、国家間の移動・共有とそのプロセスに関して調査・研究したいです。具体的にはその主体を営利企業、国家、国際機関と非政府組織に分けて企業間・国家間だけではなく、非営利組織から国家へ、国家から企業へなどのように多様な主体間の移動・共有を分析したいと考えています。また、多様な主体間の人的資源管理システムの移動と共有の中で、特に開発途上国への人的資源開発の支援に焦点を当てて詳しく研究したいです。私は開発途上国が貧困から抜け出せず、早い発展を遂げられない大きな原因の一つが効率的な人的資源管理システムの不在であると考えています。そこで、開発途上国は他の国や組織からより先進化されている人的資源開発の支援を受け、それを用いて自国に良質の人的資源を確保、活用して国の発展につなぐことが必要と考えました。したがって、現在、実際に国家や企業、国際機関や非政府組織などのような多様な組織から開発途上国へ行われる人的資源開発の支援や共有の状況を調査、比較分析し、開発途上国での効果的・体系的な人的資源開発の支援プロセスの構築に寄与したいと考えています。

私は、国家間の友好親善を築くためには国家から実施される政策も必要ですが、それより一般国民の意識改善と文化交流が最も大事だと考えます。私はここで重要な役割を果たすのが留学生だと思っています。留学生こそは両国の社会と文化を全て経験し、両国を肌で感じ、理解することによって両国民をつなぐ交流のための架け橋になれます。私もグローバル人材としてアジアの国々と日本の円滑な交流と友好関係の構築のために努力しようと思っています。今後の日本での生活でも、奨学生として採用され、貴重な支援をいただくことを常に意識し、自分の役割に最善を尽くします。

「初めまして — 監査人から大学教員へ」



金子 裕子
(商学大学院〈大学院会計研究科〉教授・
公認会計士)

2018年4月から会計研究科で監査を教えております金子裕子と申します。公認会計士稲門会の会報に寄稿する機会を頂きまして、誠にありがとうございます。

私は、これまで30年近く、大手監査法人で自動車業、航空運送業、不動産業などの上場企業等の監査業務に従事してきました。会計を通して物事を考えることができたこと、監査を通して、企業の組織やビジネスモデル、管理手法等は様々であり、環境変化に応じて常に変化していることを学べたことは、とても幸せなことだったと思っています。

監査を取り巻く状況は決して甘いものではありませんし、非常にストレスの多い仕事でもあります。しかし、資本主義のインフラとして誇りをもってやれる仕事であり、会計士の仕事は色々な可能性を持っていると考えています。2019年3月末の公認会計士登録者は約38,000人。このうち監査に特化している会計士は半数以下と言われています。独立して税務やコンサルティングを行う他、一般企業、コンサルティング会社、国や地方公共団体、非営利団体、教育機関などで働く組織内会計士も増えています。

私の場合も、監査だけでなく、2003年～2006年に金融庁企業開示課に出向し、監査基準や開示規則等の改訂に携わりました。それまで法律や規則は既に存在し従わなければならないものと考えていましたが、法律や基準も人間が作るもので、政治や経済状況に影響されるとともに、色々な人々の思いがこもっていることを感じました。日本や世界の会計や監査のルールが、どういうプロセスを経て変わっ

ていくのかを知るとともに、監査基準の改訂や四半期レビュー基準・品質監査基準等の策定に参加できたことは貴重な経験でした。

また、米国、英国、ドイツ、フランス等の金融規制当局の集まりであるIOSCO(国際証券監督機構)のディスクロージャー・サブコミッティーに参加し、国際開示原則の策定に携われたのも良い経験になりました。日米の開示制度と欧州の開示制度の違いを知ることができたとともに、ディスクロージャー・サブコミッティーのメンバーの7、8割は女性でしたので、各国の監督機関で働く女性達が同じような悩み(グラスシーリング等)を抱えていることも実感しました。

監査法人に戻ってからは、女性経営者と女性エグゼクティブのためのネットワーク Winning Women Networking を立ち上げ、5年間で34回のセミナーを実施し、1300人の女性達のネットワークを作ることができたのも会計士という信用があったからだと思います。20代のベンチャー経営者から60代の上場企業役員まで幅広いメンバーと会うことにより、様々な発想や生き方を学ぶことができ、当時の主要メンバーとは、今も時折女子会をしてパワーと刺激をもらっています。

会計や監査を取り巻く状況は大きく変化しています。会計情報はインターネットバンキングや請求書などから自動仕訳として作成されるようになり、企業はビジネスを変革していくために、財務情報を経営情報として活用していくことを求めています。監査の分野でも、発生予測モデルを用いた開示分析、分析的手続の高度化、仕訳データから機械学習で異常な仕訳を抽出するなどの新しい監査手法が導入されつつあります。クライアントとコミュニケーションをとり、多様な専門家等からなる監査チームをまとめ、適切な監査判断を行っていくために、さらには、環境変化に応じた監査技術を開発していくために、優秀な人材の確保は非常に重要です。また、企業における会計士への期待も高まっています。

会計研究科は、学生の多くが公認会計士を目指しています。優秀でひたむきな早稲田大学の学生達から、会計士業界を牽引する人材を輩出できるように努めるとともに、私自身も監査を学び続けたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

「自由な環境と自由な研究」



山内 暁

商学大学院教授

(平成10年 政治経済学部卒、

平成15年 商学研究科修士課程修了、

平成18年 商学研究科博士課程満期退学)

時が経つのは早いもので、学部を卒業してから20年以上が経とうとしています。私の会計との出会いは、会計学会というサークルでした。大変懐の深いサークルで、会計士の勉強をしている人から、他大学のサークルとの財務分析の交流大会に参加する人、遊びのイベントにしか顔を出さない人まで、多様な人が集まっていました。そのようななかで、入学したばかりの1年生の前期、いくつかのグループにわかれて、先輩方が簿記3級を教えてくれる、という勉強会がありました。そこではじめて、貸借対照表や損益計算書といったものを教えてもらいました。まったくの新しい分野で、とても新鮮に感じたのと同時に、非常に難解に感じ、まさにアナザ・ワールド。先輩方には申し訳ないのですが、まったく頭に入ってこなかったことを覚えています。これが、4年間のサークル活動で唯一、私が参加した勉強系のイベントです。全般的に、あまり勉強熱心とはいえない学部生活でしたが、他の早稲田生と同様、自由にのびのびと学生生活を謳歌しました。

大学院生としての学生生活は、学部時代とは、まったく異なるものでした。同じキャンパスに居ながらにして、まったくの別世界に迷いこんだように錯覚しました。未だに徒弟制も色濃く残る時代。研究室での業務も多く、戸惑うことも多かったのですが、研究自体は非常に楽しく、修士時代に研究テーマとして選んだ無形資産会計を中心に、会計自体の在り方を考えたりと、研究にのめり込んでいきました。博士課程に入ってから、

無形資産会計のなかでも暖簾会計を選びました。当時としては、かなりマニアックな分野だったのですが、だからこそ、無形資産会計・暖簾会計にチャレンジしようと思ったのです。博士課程時代は、忙しさもピークを極めました。夜遅くまで研究室の業務を行い、その後に図書館で資料を集め、それを帰りの電車のなかで読み手書きでノートに整理し、帰宅後にそれをワードに打ち込む、ということも日常茶飯事でした。そのおかげで、タイムマネジメントが上手くなったように思います。他大学への就職後も暖簾会計の研究を続け、早稲田大学の川村先生をはじめ、片山先生や辻山先生、慶応大学の黒川先生のあたたかい御指導のもと、10年ほど前に『暖簾の会計』という著書を纏めることができました。

もっとも大学院生には、本書を研究自体の参考にはしないように、と言ったりもします。研究は、その手法も含め、時代とともに進化していくものであるからです。本書は、あくまでも10年前のものであり、今の時代の視点で見ると、あらゆる点で陳腐化しています。また特に、博士課程を目指す学生には、研究テーマとして、難解ではあっても、チャレンジングで一生涯とりくめるテーマを選ぶよう、指導しています。その意味では、もし私自身が今、学生として新たにテーマを選ぶとしたら、無形資産・暖簾は選ばないかなとも思います。今から研究をはじめようとする人にとっては、それほどチャレンジングなテーマではなくなっているようにも思われるからです。最後に、大学院生指導の際に、心がけていることがあります。それは、自由な発想で、のびのびと研究ができるような環境づくりです。たとえば、会計の考え方としてあえて極端に二項対立的にいうと、私の研究室に取得原価主義の人・時価主義の人の両方が居ても良いと考えています。もちろん、指導の過程で私自身の考えを言うこともありますが、その考えに左右されることなく、自由に考えてもらいたいのです。また学生とは、色々とおしゃべりをしたり、必要な時には相談にも乗ったりしますが、個々人の自由な意思を尊重するようにしています。そのような、あらゆる意味でフリーな環境をつくることで、既存の考えにとらわれない、ブレークスルーとなる新たな研究が、早稲田会計から生まれることを期待しています。

「社会への恩返し」



川渕 純治
(2003年商学部卒業)

「ヒトは一人では生きられない。」自分自身も社会から育ててもらったように、これから少しずつ、社会に恩返しをしていきたいと思います。

結婚して今年で丸7年、1歳10ヶ月になる息子は、大人のコトバが理解できるようになり、ずいぶんコミュニケーションがとれるようになりました。

朝食では、息子はスプーンを片手に持ったまま、牛乳の入ったコップを手に取り、バナナが入った器に手にしたコップの牛乳を流し込み、今度はバナナと牛乳が入った器を手に取り、コップに全量流し込む、これを何度も繰り返します。

一連の行動をしばらく眺めたあとに、私が「食べ物で遊ぶなら、ゴハンはもう終わりだよ。片付けるね。」「あなたと同じように生きていた、大事な命を頂いているんだよ。」と声をかけると、どこで覚えたのか、息子は薄目になってアゴを上げ、狸寝入りを始めます。

そんな息子の頭をクイツと両手で挟んで自分の顔を近づけ、「いま大事な話をしているんだよ。」「人が大事な話をしているときは、キチンと相手の顔を見て、話を聞きなさい」と言うと、今度は、目に入った向こうのオモチャを指さして、これと一緒に遊ぼうとジェスチャーし、私の気を逸らそうとしてきます。自分に都合の悪い話をされると聞いていないフリをするのは本能なのでしょうが、息子とのやり取りは毎日とても楽しいです。

私は長崎県佐世保市の出身で、大学入学を機に東京へ出てきました。いまも両親は佐世保で暮らしています。私の親元が遠いこともあり、結婚して妻と共同生活を始める際は妻の実家のそばに住もうと決めていました。

実際に、妻の実家から徒歩10分のところに居を構え、結婚してからはほぼ毎週末、妻の実家にお邪魔して夕飯を一緒に食べ、団らんしてから自分たちの家に帰ることを続けています。

妻には、今年で98歳になる祖母がおり、妻の両親と3人で暮らしています。最近足腰が弱り、だいぶ身の回りのことが自分ひとりでは出来なくなってきていますが、頭はしっかりしており、みんなの団らんにも参加しています。そんな義理の祖母は、時折、「私は十分生きたから、いつお迎えがきてもイイのよ」と言いますが、毎日お風呂上がりには体重計に乗り、「あー少し痩せてきたわ」と心配し、調子を崩すと直ぐに病院にかかって薬をもらってくるので、これが長生きの秘訣かなと思っています。

私の息子と義理の祖母とは96歳差で、同じ酉年生まれです。酉年どうしウマが合うのか、週末の団らんで妻の実家にお邪魔すると、息子はおおばあちゃんにニコニコと手を振って挨拶し、別れ際にも二人で握手してバイバイするなど、二人とも大変楽しそうに過ごしています。常々、息子には「挨拶は大事だよ」と伝えており、家族や保育園の先生など見知った人に対しては、キチンと挨拶ができるようになってきました。息子も社会の一員として、日々成長しているようです。

さて、私は5年ほど前から、日本公認会計士協会東京会の広報委員として、主に「ハロー！会計」という小中学生向けの会計の基礎的な素養を伝える社会貢献活動に携わっています。ハロー！会計を受講した子どもたちの気づきや学び、楽しんでいる姿に触れるのが大変楽しいです。

私は有り難いことに、両親や祖父母など家族に恵まれ、早稲田大学では生涯の仲間に出会うことができ、やり甲斐ある公認会計士という職業に就くことができ、大切かつ素敵な家庭を持つことができました。これも一重に、広く社会のお陰だと感謝しています。

私たちが生きている現代社会は、日々刻々と変化しており、そのペースも年々速くなっているように感じています。この変化の激しい世の中を、将来を担う若い世代が自らの幸せを掴むべく生きて行けるよう、ハロー！会計を通じて、ヒトとして社会を生きる楽しさを伝えていくことが、いま私ができる社会への恩返しだと思っています。

「学生時代から現在まで、 平成を振り返る」



河合 秀敏
(商学部 1995 年卒業)

私が早稲田大学に入学したのは1991年の平成3年で、平成になって間もなくの入学でした。新たな時代の幕開けと時を近くして入学しましたが、あれから30年近く経ち、新しく令和の時代となりました。

早稲田大学への入学当時、すでにバブルは崩壊していたものの、世の中的には、まだ不況を感じるところには至っておらず、バブル期の余韻を残していました。

将来のことに関しては、まだ何も考えておらず、何とかなるだろう、回り道をしてもいいじゃないかという甘い考えで、日々大学時代を過ごしていました。

1. 大学時代

憧れの大学に入学できたことで満足し、卒業後の将来の具体的な目標もまだ持たず、アルバイトやスキー、飲み会の日々でした。周りの友人たちが就職を見据えゼミに入る中、私の方は特段ゼミにも入らず、相変わらずの大学生活で、無為に過ごしていました。気づけば、卒業単位も足りず留年が決定してしまいました。

留年も決まったことだし、商学部に在籍していたこともあって、公認会計士でも目指してみようかという軽い気持ちで勉強を始めてみました。

一般企業への就職ではないので、3月で卒業する必要はないと思い、大学のほうは半期で単位取得できる講義をとり、9月で卒業するという選択をしました。

2. 受験勉強と放浪生活

公認会計士になろうと思って勉強をしてみるものの、想像以上に難しく、全然頭に入って来ず、身につけませんでした。もともと絶対公認会計士になりたいという強い意志もなく、軽い気持ちで始めた勉強のため、当然身が入りません。勉強が進まず、かといって今さら一般企業への就職も難しいという閉塞的な状況から、気分転換と称し、東南アジアへ旅行を始めるようになりました。

1, 2ヶ月旅行しては帰ってくるという生活をしていましたが、当然勉強モードに切り替えるのは難しく、また旅行に行きたくなくなってしまって、勉強に身が入らないという状態にありました。このままの生活を続けても仕方がないと思い、こうなったら満足するまで行こうと思って、現地での生活を始めました。

毎日が楽しく、わくわくして暮らしていましたが、そういう日々も長くは続きません。物価の安い東南アジアで無為に過ごしている同じような日本人と会うたびに、自分もいつかこうなってしまうのかと、ある種の恐怖を感じ始めました。

そして、やはり公認会計士になろうと本気で思うようになり、日本に帰ってきて受験勉強を再開することにしました。

3. 公認会計士として

現在、中堅監査法人でパートナーとして監査業務を行っています。

放浪生活をしていたことは、残念ながら、現在の仕事には全く役に立ってはいませんが、日々業務に追われ、忙しく生活していても、無為に過ごしていたあの頃には感じるができなかった充実感を感じています。

大きく回り道をしましたが、結果的に現在こうしているのも、早稲田大学を卒業したというプライドがあったからこそ、放浪生活に見切りをつけ、再度公認会計士になるための勉強に打ち込めたのだと今では思っています。

最後に、平成が終わり、新たに令和の時代が始まりました。新たな時代にも早稲田大学出身の公認会計士が大勢誕生することを期待しています。

「監査の魅力」



小林 勇人

教育学部国語国文学科卒業
(1998年3月卒業)

会報の寄稿の機会をいただきましてありがとうございます。今回、私の今までの会計士人生で思い感じたことを記載させていただきます。

1. 公認会計士になろうと思った理由

教育学部国語国文学科であり、周りに公認会計士を目指す友人も全くなかった私が公認会計士になろうと思ったのは、高校時代大学時代に10種類以上のアルバイトをした結果、たどり着いた結論でした。色々なアルバイトをしてみたのは、私が飽きっぽい性格だからというわけではなく、自分に合った仕事を探すために色々を試してみたからです。接客業、肉体労働、事務作業、家庭教師等、幅広い種類の仕事を経験した結果、自分に嘘をつかずに正直になれる仕事、人とコミュニケーションをとって人を動かす仕事、論理的思考を使う仕事、ビジネスの世界に携われる仕事、そして社会に貢献できる仕事をしたいと思い、それを全て満たしているのは公認会計士だと思い、公認会計士試験にチャレンジしました。

2. 監査業務のやりがいと自分の成長

公認会計士試験合格後に大手監査法人に入所し監査業務に従事しました。監査という仕事は想像通り、やりがいがあって魅力的な仕事でした。これは監査業務に携わった公認会計士の多くの方々と同じだと思いますが、仕事の質量ともにハードではありましたが、優秀な諸先輩方や同僚と一緒に仕事をするのは刺激的であり、また色々な会社を見ることができて日々学びがありました。監査業務は公認会計士の独占業務なわけですが、ビジネスとしても独占業務であると同時に、色々な

会社の帳簿、経営、文化等を内側から見るができるという経験も独占業務であると思い、本当に貴重な職業だと感じていました。

3. 公認会計士として社会貢献

このように監査業務を通じて仕事も充実し、自身の成長も感じていたわけですが、これだけであればおそらく私はどこかのタイミングで監査の世界を離れて、他のフィールドにチャレンジしていたような気がします。結果的に今まで20年近く監査業務を続けているのは、会計士人生の7年目、上場準備会社のインチャージをしていた時にクライアントの粉飾決算に遭遇したからだと思います。その会社では多額の売上とソフトウェアの取得が近い時期に行われていて、証憑も残高確認も全て証拠が揃っていたので、私は監査調書を作成しかけました。しかし、どうも違和感を感じたため、経営者と何度も議論し、取引先をとことん調べ、取引先の現地にも足を運び、最終的にこの売上高とソフトウェア計上は、他社と共謀した実体がない循環取引であることを突き止めました。粉飾決算をしていた会社の上場を阻止することができたことは、まさに自分が資本市場の番人として投資家を保護する使命を果たせたと感じると同時に、私が学生時代に公認会計士を目指した理由の1つが社会に貢献することだったことを思い出す出来事でした。

4. 採用担当を通じて20年前の自分に

この出来事以降、私はさらに監査業務に魅力を感じるようになり、今はEY新日本有限責任監査法人のパートナーとして監査業務を行うと同時に、採用担当としてリクルート活動を行っています。リクルート活動をしている中では、公認会計士試験合格者はもちろん、試験合格前の受験生に対して監査業界の魅力を伝えていきたいと強く思っています。なぜなら、私自身、公認会計士試験には何度も不合格となり苦しんでおり、今、一生懸命勉強している受験生が20年前の自分に重ね合わせて見えてしまうからです。公認会計士試験という難関にチャレンジしている受験生に業界の魅力を伝え続け、一人でも多くの方に公認会計士としての充実した人生を送っていただき、そして、この業界全体を盛り上げていくことが、今、私にできることだと思っています。

「理工学部から公認会計士へ」



前田 真宏

(2017年 創造理工学部 卒業、
2019年 創造理工学研究科 修了)

この度は公認会計士稲門会の会報に寄稿するという貴重な機会をいただき、大変光栄に思っております。稚拙な文章ではありますが、私が公認会計士を目指した経緯と今後の目標について書かせていただこうと思います。

1. 合格までの道のり

2013年に、私は創造理工学部 総合機械工学科に入学しました。漠然と機械に興味があるという理由で入学しましたが、実際に機械に関する様々な授業や実習を受けている過程で、ただ単に興味があるというだけではエンジニアとして生きていくことはできないと感じていました。

そして、大学4年時に自分の興味と将来について改めて考え直した際に、多くの職種に幅広く関わるのできる仕事に就きたいと思うようになりました。また、社会に出る前に少しは経営に関する知識を身につけたいと考え、大学院からは経営システム工学専攻に転向することに決めました。さらに、大学院進学後に様々な職業について調べる中で、専門性があり、なおかつ活躍のフィールドの幅が広い公認会計士という職業があること

を知り、一念発起、公認会計士試験に向けて勉強を開始しました。

こうして修士1年の途中から学習を開始しましたが、大学院から専攻を変えたこともあり、研究と試験勉強の両立は決して平易なものではありませんでした。しかし、幸運にも何とか在学中に合格することができました。

2. 今後について

合格後から非常勤職員として監査法人に勤務させていただき、現在初めての期末監査を迎えています。今はまだ分からないことばかりで、毎日新しいことを学んでいる最中ですが、公認会計士試験を受験して本当に良かったと感じております。

将来の目標は、学士過程での医療機器の研究や、修士課程での品質工学の研究のバックグラウンドを活かした会計士となることです。そのために、若い年次から様々な業務に積極的に取り組み、会計士として求められるスキルを身につけたいと思います。

3. 最後に

合格発表後の就職活動から現在に至るまでの間で最も印象に残っているのは、会計士業界における稲門会の存在感の強さです。どこの法人でも、早稲田出身の会計士の先輩方が活躍されていました。私が現在勤務している法人を選んだのも、私と同じ学科出身の先輩が多数活躍されているのを肌で感じたことが大きな理由です。

最後になりましたが、公認会計士稲門会の一員としてこのような機会をいただきまして、誠にありがとうございます。今後は積極的に稲門会の活動に参加させて頂きたいと考えております。まだまだ未熟者ではございますが、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。

令和元年 定時総会のお知らせ

令和元年定時総会は、下記の通り開催の予定です。会員はもとより早稲田大学で教鞭をとっておられる先生方、他大学よりの来賓の方々も多数出席され懇親のよい機会です。是非多数の会員に参加をお願い致します。

日 時 令和元年 7月 9日(火) 定時総会：午後6時30分より
懇親会：午後7時より
場 所 大隈会館 201・202号室

「早稲田でつかんだ合格と今後の目標」



芋川 千晴

(2019年3月商学部卒)

初めまして。昨年度公認会計士試験に合格いたしました芋川千晴と申します。

晴れて、公認会計士試験に合格し、公認会計士稲門会の一員となれたこと、非常に嬉しく思っております。

私は、大学一年生の夏ころより、公認会計士試験の勉強を始めました。最初は大学の授業の延長のような軽い気持ちで始めた勉強でしたが、なかなか成績が思うようにならず苦しい思いをすることも多くありました。振り返ってみますと、私が長い受験生活の中で諦めずにチャレンジし続けられましたのも、早稲田大学の学生であったからかと思えます。

といいますが、早稲田は、個々人がのびのびと、良い意味で自由気ままに過ごすことができる雰囲気があると感じているからです。実際、私の大学の友人の中には、サークル活動に打ち込んでいる人、ボランティア活動に打ち込んでいる人、海外を一人旅する人、など各人各様の大学生活を送っていました。そして、早稲田の素晴らしいところは、そのような一人ひとりの打ち込みたいことやライフスタイルを認め応援してくれる空気が流れているところではないかと考えております。私自身、応援してくれる友人、気分転換に遊んでくれる友人、それぞれの分野で努力している友人に恵まれたからこそ、自らの道を貫くことができ、

【人生の夏休み】といわれることもある大学生活に勉強を中心とした生活を送ることを選べたのかと思います。

勉強中心の生活と言いつても、趣味の旅行に行くことができ素敵な思い出がたくさんできた四年間でした。大学4年生の時には、国内海外、一泊旅行も含めると10回旅行に行くことができました。特に、初めてのイタリア旅行は非常に楽しく、おいしい食事や、素敵な街並み等、日本に帰りたくないと感じるほどでした。長期休みをとった際にはまた必ず、イタリアを訪れようと思っています。

また、英語の勉強の必要性を強く感じた旅行でもありました。私は、今まで海外旅行には何度か行ったことがありましたが、添乗員が同行してくれるか、学校の研修しかありませんでした。しかし、今回初めて移動の手配等を自身で行い、英語力の拙さを感じるとともに、英語が話せたらさらに旅行が楽しめるだろうと悔しい思いを致しました。イタリアの公用語は英語ではありませんが、そのような国でも英語を通せばコミュニケーションを図れることを強く実感いたしました。英語ができるようになれば、私生活の充実がさらに高まるだけでなく、仕事の幅も広がると思いますので、今後は英語の勉強を頑張っていきます。

公認会計士としてのスタートは始まったばかりであり、今後の目標は、現時点では具体的に定まっていますが、最初の数年間はさまざまな分野に挑戦することで見つけることができたらと考えています。まずは、頂いた一つ一つの機会を大切に、丁寧に仕事をこなし、私に仕事を任せて良かったと思っただけのように努力してまいります。

今後、公認会計士としてのキャリアを積んでいく中で、稲門会の皆様にはお世話になることもあるかと思いますが、同じ社で育った一人として今後ともご指導ご鞭撻のほど頂けましたら幸いです。改めて、これから稲門会の一員としてよろしくお願いたします。

公認会計士稲門会ホームページについて

公認会計士稲門会では、2012年10月にホームページを開いたしました。是非、ご覧ください。

URL www.cpa-tomonkai.jp

公認会計士稲門会は、会員相互の親睦、情報交換の場として会員がボランティアで運営しております。総会、ゴルフコンペ、忘年会等の親睦や合格祝賀会の開催等の後進育成をしております。また、特筆すべき事業としてアジアからの留学生

に対する支援と母校への講師の派遣を行っております。母校とは「士学協同」し高い評価をいただいております。

コンテンツが、不十分ですが今後充実させていただきますので、よろしくお願いたします。

会報発行費、通信費等の費用は会費によってまかなっております。HOME⇒入会案内⇒入会登録され、会費納入いただけたら幸いです。

「合格までの道」



織戸 梨穂

(国際教養学部 2015年卒業)

このたびは、公認会計士稲門会会報に寄稿させていただきます。ありがとうございます。
国際教養学部出身の公認会計士はめずらしいかと思いますが、私の公認会計士合格までの道や今後の目標について書かせていただきます。

1. 大学卒業まで

私は小学校1年生から3年生までの間をアメリカのニューヨーク州で過ごしました。英語を何一つ知らない状態で現地の学校に通い始めました。最初は周りと言も話すことができませんでしたが、徐々にアメリカ人のクラスメートと話ができるようになった時の喜びは今でも覚えています。小さい頃でしたが、この時に英語や異文化、外国人とコミュニケーションを取ることを知りました。

当時の経験もあり、英語で授業が行われ、留学にも行くことのできる国際教養学部の魅力を感じ入学しました。国際教養学部にはたくさんの留学生が所属していたので、様々なバックグラウンドを持つ学生と交流を持つことができました。また、アメリカのイリノイ州にある大学に1年間留学に行くこともでき、充実した毎日を送ることができました。

2. 就職、退職

大学卒業後は銀行に就職しました。銀行では後方事務、保険や投資信託などの金融商品の営業を担当させていただきました。しかし、働いていく中で海外とつながる仕事がしてみたいという思いが強くなりました。また、銀行での仕事を長く続けていけるのかという不安を感じ始めました。

転職をしようかと考えていた時に公認会計士という選択に至りました。元々算数や数学は得意ではなかったため、数字を扱う会計士を目指すことに決め

たのは自分でも意外でした。

私が公認会計士の仕事に感じた一番の魅力は海外で活躍できるチャンスがたくさんあることです。また、専門性が高いので女性も長く働き続けている方が多いこと、監査だけでなく様々な分野で働くことができるということにも大きな魅力を感じました。

公認会計士として早く働きたいと思いました。当初は働きながら受験勉強をしていましたが、限られた時間で膨大な範囲の試験勉強をするのはとても大変でした。

公認会計士になる夢を早く叶えるためには勉強に専念した方が良くと考え、銀行を退職しました。

3. 資格勉強

退職をして臨んだ会計士試験だったので、大きなプレッシャーを感じましたが、家族には精神的にも経済的にも支えていただきました。

一人で勉強するよりも周りに受験生がいた方が勉強へのモチベーションが上がると思い、退職を機に予備校の通信講座を通学講座に切り替えました。勉強の内容はとても難しく、大変なことはたくさんありましたが、受験仲間にも恵まれたため何とか乗り越えることができました。合格まで辿り着くことができたのは家族、友人、予備校の先生方の支えがあったからです。支えてくれた周りの方々には本当に感謝しております。

4. 今後について

合格後は監査法人に就職し、現在は監査の現場に出させていただいております。

現場に出て感じることは、クライアントから信頼されるためにはたくさんの勉強が必要だということです。

今はまだわからない事ばかりですが、私もクライアントからの期待に応えられるように、早く監査を理解したくさんの知識を得ていこうと思っています。

そして、将来的には海外監査チームとのコミュニケーションの場面などで中心となれる存在になれるように頑張っていきたいです。

最後になりましたが、今回は会報に寄稿させていただくという素敵な機会を与えてくださりありがとうございました。私も社会に貢献できる公認会計士になれるように日々頑張っていきますので、今後ともよろしくお願い致します。

「『化ける』ということ」



滝沢 凜

(商学研究科修士課程1年・2019年商学部卒業)

私の母校である早稲田中高には「学年だより」という配布物がある。それは決して特別な文化ではない。学年を受け持つ教員たちが伝達事項をまとめた印刷物である。「学級通信」「学校だより」と名称は異なれど、それを生徒へ配るという光景は多くの学校で見られるだろう。

配付物を受け取ったという事実は誰もが今でも覚えていることだと思う。では、中身についてはどうだろう。事務連絡や試験講評を除いた「教員からのメッセージ」に関して、何が書いてあったかを覚えているだろうか。私自身ほとんど覚えていないと言っても過言ではない。きちんと文章に目を通すこと自体あまりなかったと思う。高校生にとって教員と正面から向き合うのはくすぐったく、他にもっと興味の湧くことがたくさんあるからである。

しかし、「『化ける』ということ」と題された巻頭言だけは今でも記憶に残っている。巻頭言を執筆したのは美術科の学年主任。私の属した水泳部の顧問でもあり、中学高校の6年間をお世話になった。教員歴は長く、彼が教壇に立つ時はいつも教室の空気が引き締まった。毎年くださる年賀状にはコメントこそないものの、彼が製作したと思われる塑像(顔、女性、チンパンジー…)の写真がありユーモアが感じられる。

そんな学年主任はこれから進路を考えようとする私たち高校2年生に向け、このように綴った。

「高校2年の秋を迎えると、目の色を変える生徒がでてきます。まるで人が変わったかのように目標に挑む生徒がでてきます。それが『化ける』

ということです。君たちが思う存分『化ける』ことを願っています。」

正確な文章は覚えていないが、こんなニュアンスであったと思う。原文を参照したいところだが、悲しいかな行方がわからない。家中探しても見つからないだろう。ご存知の通り、学年だよりはは長期間大事に保存する性格の書類ではないのだ。

私はなんとなく、この巻頭言を読んだ。普段は読まないのだが、これまでのバックナンバーと比べて思いが込められているのが伝わった。言いたいことはわかるけれど、そう簡単に人は変わったりしない、と読んでいて思った。

その後、印象的な出来事がおこる。友人との会話の中で「化ける」という単語が出てきたのだ。つまり彼は学年だよりを読んだ後、それを消化・吸収し、会話に織り込んだということになる。

繰り返すが、大抵の高校生は学年だよりをじっくりとは読まないはずだ。したがって、同級生がしっかりと巻頭言を読んでいることに私は驚いた。ましてその内容が生徒同士の会話の中で登場したことに、ある種の感動すら覚えた。

結果として、友人は「化けた」。彼は中学のとき私とさほど変わらない成績だったが、高校卒業までに学力を伸ばし、私を大きく引き離れた。大学受験では早稲田大学の推薦を申請せず、「浮気はしない」と言いながら本命だけを受験して合格した。彼は格好良かった。

それから数年が経ち、大学4年生となった私は公認会計士試験の合格発表日を迎えた。霞ヶ関の掲示板を確認したあと早稲田に向かい、母校に合格を報告しに行った。学年主任は以前会った時とは違う面持ちをして笑っていた。振り返ってみると、自分の中で受験が終わったのはこの時だったのかもしれない。

自分を変えることは難しいけれど、他人を変えることはさらに難しい。そして誰かの選択を左右するのは、愛ある言葉なのか、格好良い背中なのか、まだ私には何とも言えない。

ともあれ、1つ言えることがある。学年だよりはきちんと読んだ方がいいということだ。

「試験との出会い、今後の目標」



奥中 則行
(2007年 商学部卒業)

この度は公認会計士稲門会会報に寄稿する機会をいただき誠に有り難うございます。僭越ではございますが、私の公認会計士を志すきっかけや今後について少し書かせていただこうと思います。

1. 公認会計士試験との出会い

私が公認会計士という資格を知ったのは、高校2年生の頃、大学の進路を考えていたときのことです。当時の私には公認会計士という職業についても全く想像できていませんでしたが、会計の知識を武器に社会に貢献できる職業もありだな、くらいに思っていました。当時は何かしら将来について目標を持たないといけない気がして、大学での目標を公認会計士試験合格にしました。しかし、事はそう順調にいきません。大学入学後いざ勉強を始めてみると、簿記3級が全く面白く感じません。なんか自分がやりたいことと違うかもしれない。そう思ったら、もう電卓を叩く気にはなれませんでした。今になって思うと、もし少しでも私が公認会計士という職業を知っていれば、もし面白くなるまで勉強を続ける忍耐があれば、もし受験仲間でもいれば、と思わされます。それからの私は、公認会計士とは無縁の学生生活を送ります。学業のほか、同年代の仲間とともに4年間の寮生活を送るとともに、サークル活動やアルバイトをして過ごしました。そのおかげで、今でも気軽に集まれる気心の知れた生涯の友を得ることができました。これはこれで私の人生においてかけがえのない時間となりました。

そんな私は卒業後、高圧ガスの製造販売をする会社に就職し、法人向けに営業職をすることになりました。そこでは、顧客の生産拠点を見させていただく機会を多くいただきました。そのような環境で働く中で、各会社により生産品目や稼働率、生産管理の巧拙までもさまざまであると肌感覚で感じる事ができ、会社って個性があって面白い、会社がどのようなものなのか包括的に学びたいと思うようになりました。それは、公認会計士を目指す2回目のきっかけとなり、高校時代に訪れたきっかけよりも強い動機付けになりました。

それから暫くは、公認会計士試験のことが仕事でも頭から離れません。「このまま自分の挑戦したい気持ちを無視し続けたらきっと後悔する」。そう思うように至り、もはや公認会計士試験に挑戦しないまま過ごす選択肢が私の中から無くなりました。

その時、社会人5年目のことでした。退職して勉強に専念することにしたため、それからの受験生活はあまりお金のない生活でしたし、楽観的な自分でもたまに不安になるくらいには四苦八苦しましたが、受験期間を通して不変だったことは「新しいことを学ぶことは刺激的で面白い」という気持ちです。それに、自分の目標に向かって100%集中できる時間がとても有難かったですし、自分や家族と向き合う大切な時間にもなりました。この点、家族には本当に負担をかけたなと思いますし助けられました。これには本当に感謝しています。

2. 今後の目標

やっとの思いで合格を手にした私にとって、今後の目標は何かという質問は、少し難しく感じられます。まずは現在の職場において、自分が面白いと思った仕事に対して積極的に手を挙げて最大限の貢献をしていきたいと思っています。そのためには、自分の可能性に蓋をせず、仕事以外にも日々いろいろな情報にアンテナを張って自己研鑽に努めたいと思います。そのときはまた母校へ足を運ぼうと思います。

「文学部から公認会計士へ」



鎌上 和磨
(文学部2012年卒)

1. 会計士を目指すきっかけ

私は2012年に文学部日本語日本文学コースを卒業後、地元で塾の講師をしておりました。子どもたちに勉強を教えることは非常に面白く、やりがいを感じていました。しかし、子供たちに勉強を教えていく中で、次第に「勉強しか教えられない」ことの歯がゆさを感じるようになりました。塾では授業にて学習内容を指導するだけでなく、進路の相談を受けることもありました。志望校を決めるべく「将来何をやりたいのか」と聞いても、そもそもどういった職業が世の中にあるのか、そしてどういったキャリアパスを築いていけばよいのかわからず途方に暮れる子供たちは一人や二人ではありませんでした。私も塾業界しか知らなかったため、そんな彼らを前にも的確なアドバイスを出来ず苦い思いをしていました。そうした中で「世の中にはどういう会社があり、どのように社会は動いているのか」ということを肌身で感じてみたいと思うようになりました。こうした思いの中、様々なキャリアを築くことができ、世の中の様々なビジネスに関与できる公認会計士を志すこととなりました。

2. 受験生時代

予備校の通信教育で受験勉強を始めましたが、自分の生徒たちへの指導の在り方が正しいかどうかを再確認し、そしてどのように指導をすればわかりやすいかを勉強するよい機会にもなりました。朝は会計の勉強をし、夜は生徒たちの勉強を指導する生活は大変ながらも多くの気づきを生むものでした。会計という自分にとっては未知の領域を勉強することに対する好奇心が先行し、手探りではありながらも知識を吸収していく過程が楽

しかったように思えます。しかし、「受験に合格する」という目標を達成するには、結果が全てです。限られた時間や定められた期間の中でどのようにして合格点をとることができるのか。勉強を始めてからの2年半、塾講師としてのそれまでのキャリアを生かし、常に自問自答しながらようやくつかんだ合格でした。

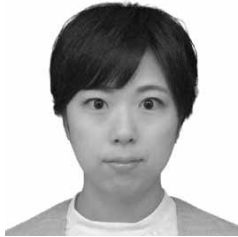
3. 今後の夢

私は2019年4月にPwCあらた有限責任監査法人に入社し、ようやく1ヶ月が経ちました。新米会計士としてスタートを切ったばかりで当面は日々の業務をしっかりとこなし、色々なところから勉強させていただきたいと考えています。優秀な同期や諸先輩方、上司の方々から学び、自分の何が強みになるのかを様々な業務を通じて知っていきたいです。当面の目標は先に述べさせていただいた通りですが、少し大局的な夢として申し上げますと、「金融・会計の教育に携わりたい」と思っています。私は子供のころから株式投資に興味がありました。しかし、子供が株式投資について興味を持つことは不健全とされ、投資の本を読んでいたりすると教師にも「子供はもっと学べべきことが他にある」と一蹴されてしまいました。大学を卒業して7年が経ち、同級生に会うと、私たちは大抵仕事の話をし、そしてお金の話をします。私たちは「お金の話が必要な世界」にある日突然放り出されて、そこからようやく学びをスタートさせています。しかし、学校のように体系的に教えてくれる機関はなく、知識や情報集めに右往左往しているのです。

子供の頃は大人に守られていたから、お金について知る必要はなかったかもしれません。しかし、自分を守り、そしてまた誰かを守るためお金について学ぶことは誰しもにとって必要です。いまだにタブー視されている「子供に対するお金の話」に、『教育』として光を当てることができたらどんなに素晴らしいことだろうと、胸を躍らせています。

大言壮語ではありますが、秘めたる野望として私の夢を語らせていただきました。最後までお読みいただきありがとうございます。今後とも稲門会の一員としてよろしくお願い致します。

「早稲田大学が、好きだ」



佐藤 あけみ
(2009年度第一文学部卒業)

この度は、公認会計士稲門会会報への寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。

誠に恐縮ですが、先日の祝賀会の挨拶で「早稲田大学が大好きだ」とお話しするに至った、私と大学との関わりについて述べたいと思います。

第1章 早稲田大学入学

田舎生まれの私は、早稲田大学に進学していた姉に憧れて第一文学部に入学しました。そこでは、会計に触れる機会は一切なく、卓球サークルとアルバイト漬けの学生生活を送りました。

週2日、仲間と卓球後に居酒屋で乾杯し、残り居酒屋でのアルバイトに汗を流す日々です。珍しいことに、平成も折返しを迎えた当時であっても給料は日払いで、店が閉まると給料が入った茶封筒を握り締め、高田馬場の安い居酒屋で仲間と朝まで語らって過ごしておりました。

この時に一生の友人ができたこと、そして今でも自信满满に校歌と紺碧の空を歌うことができることは私の大事な財産であります。

第2章 故郷で出会った早稲田大学

光陰矢の如し、楽しい日々はあっという間に過ぎ去りました。5年間過ごした早稲田を離れ、私は地方銀行に就職を決めました。

東京に未練を残して戻った故郷で驚いたことは、早稲田大学のOBがたくさん活躍していたことです。特に、印象に残っているのは、大学OBの上司に声を掛けてもらって参加した地域の稲門会での経験です。そこでは「50代は若造!」と言われるほどに大先輩が揃い、80歳を超える方も元気に参加していらっやいました。皆さん、早稲田の思い出をまるで先週に近所で起きた出来事のように鮮明にお話されており、最後には一緒に校歌を歌って会の幕は閉じました。

その時に強く感じたことは、かつて早稲田に「集まり」、後に遠く離れた場所に「散じ」たとしても、早稲田に対する想いを共有できれば、時代も場所も飛び越えて「同じき理想の光」を仰ぐことができるのだ、ということです。稲門会で出会った先輩方には、仕事で困った際にも大変助けていただき、早稲田大学の繋がりに改めて感謝をする機会となりました。

このように仕事も慣れて順風満帆でしたが、私は、ひとつ心残りを抱えておりました。

第3章 早稲田大学での勉強

学生時代、私は学問を究めようとする学生に憧れを持っていましたが、失敗することを恐れて何も始めることができませんでした。勤勉な学生への劣等感がぐんぐん成長していく程に、私はサークル活動にのめり込むようになりました。弱い自分から目を背け、逃げ帰った故郷。しかしながら、仕事で成果を出すことにより、少しずつ自分に自信を持てるようになっていきます。

そして27歳の時、私は公認会計士を目指すことを決めました。人生初のチャレンジです。

再び上京し、試験勉強を始めると、縁あって早稲田大学で働く機会をいただきました。恥ずかしながら、学生時代は週に1~2度ほどしか訪れなかったキャンパスでしたが、それからは入社前に勉強、昼休みに勉強、退社後は大学図書館で勉強、と毎日キャンパスに通う日々を2年間過ごしました。もちろん、100パーセント学生時代をやり直すことなどできませんが、勉強漬けの毎日を過ごすことで、心の中に巣食っていた劣等感や後悔は少しずつ小さくなっていきました。

また、職場でも試験勉強に対しご理解と応援をいただいたことに心から感謝しております。

第4章 これからの早稲田大学と私

チャレンジすらできずにいた私が公認会計士試験に合格できたのは、家族の支えと早稲田大学により繋がった方々との出会いのお蔭です。

そして今、公認会計士稲門会の一員となれたことを大変うれしく思っております。これまで私が助けられてきたように、後輩の背中をそっと支えられる先輩になることが私の目標です。

今はまだまだ先輩方に学ぶことばかりでございます。今後ともご指導くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

「大野高正先輩のこと」

小西 彦衛

(昭和44年商学部卒業)

ある年の役員会で懇親会場に移動する路上でのこと、大野高正先輩と私は肩を並べて道路の左側を歩いていました。歩き始めには大野先輩の左側にいた私はそれとなく右側に移りました。大野先輩は間を空けずに「小西さんは優しいね。クルマが走っている側を歩いてくれるのだね。」とおっしゃいました。内心はそのとおりであった私は、胸の内で大野先輩は人の心の機微に敏感な方だなと思いました。

大野高正先輩は本年4月12日に93歳の天寿を全うされました。ご葬儀ではお別れの時に遺書が朗読されました。ご自身の人生経験、ご家族のこと、職業人生のこと、早稲田大学のこと、親交ある方々への感謝の気持ちを綴っていらっしゃいます。

大野先輩が16歳の年にご両親が相次いで逝去されたそうです。その後、早稲田大学専門部商科在学中に陸軍に志願して入隊し、航空兵として鹿児島県の鹿屋基地から制空権も制海権も失っている沖縄沖にキ-67雷撃機で四度出撃しながら九死に一生を得ています。出撃時には自分は我が身一つであるがゆえに命が絶えることを受け入れると心に決めたそうです。搭乗機で乗員6～8名の一員として出撃するときの心中は察するに余りあります。大野先輩から感じる何気ないときの真剣な眼差しは青少年時代から難儀の一つひとつ乗り越えてきた人生経験によるものと思いました。

東京都港区の監査委員として永くご尽力され、代表監査委員もお務めになったことは公認会計士の仕事として先駆的なことです。現在では公認会計士業務の一分野としている公的部門の業務の先駆けであると思います。地方自治功勞で旭日單光章を受章されています。

早稲田大学では、兵役から復学した専門部商科を昭和21(1946)年に卒業し、作田会計事

務所に勤務しながら再入学した政治経済学部を昭和24(1949)年に卒業しています。

大野先輩の早稲田大学への並々ならぬ思いは皆さんご存知のとおりです。殊に次代を担う若者たちへの期待から早稲田大学に寄付された基金によって大野高正奨学金として公認会計士を目指す商学部を中心とした学生に給付しています。

当会の奨学事業は、田中祐輔先輩の発意によって平成3(1991)年に創設し、会員有志の皆様からの寄付金を奨学資金にして、アジア地域からの留学生に公認会計士稲門会奨学金を給付していることは周知のとおりです。田中先輩の多大なご尽力によって今日に至る一大事業になりましたが、田中先輩の活動には創設時から永く大野先輩によるお力添えがありました。

ご子息大野高裕教授は当会と親密な本学教授陣のお一人です。創造理工学部経営システム工学科で研究と教育に快活に努めていらっしゃいます。門下生から公認会計士を輩出しています。本学科を理工学部工業経営学科として記憶している皆さんも多いと思います。学生部副部長のときには、学生集団の紛争の中に体を張って割って入り、スーツの片袖が引きちぎられた姿がありました。先ごろまで本学理事を務めていらっしゃいました。大野高裕教授が語る早稲田大学の歴史の講演は秀逸です。

小高い枇杷山の明るく静かな別荘には木々の緑とともに眼下に内房の富浦と東京湾の海が広がる風景があります。縁側を開け放って心地よい風を感じながらいただく昼ご飯は格別でした。昼食時に敷地内の家族などを呼び寄せるために大野先輩が木魚を叩いたことは楽しい思い出です。私ども家族は枇杷の最盛期にお招きいただきました。優しい董夫人が出荷する枇杷の包装の仕方を娘たちに教えていただきました。大野先輩の日常の一面に触れる思いでした。董夫人も昨年他界されています。

このように思い起こしていくと思いが尽きません。私ども後輩に厳しさも心優しさも与えてくださった大野先輩です。

大野高正先輩 ありがとうございます。

大野高正先輩・学生時代



大野高正先輩と董夫人



編集後記

藤田新会長から会長就任のご挨拶をいただきました。

母校の先生二人にご執筆いただきました。

合格者の皆さんから早稲田愛にあふれる寄稿もあり、久々に感動！

また、小西会員から大野高正先生をしのぶご寄稿をいただきました。

寄稿者の皆様、お忙しい中ご執筆ありがとうございます。

(会報担当 松下八寿彦)

(印刷会社 三共総合印刷株式会社)